2007.06.07～2008.05.22更新

吉田東伍著『大日本地名辞書』

萩原　義雄

吉田東伍著『大日本地名辞書』〔冨山房書店〕

吉田東伍記念博物館　http://www.city.agano.niigata.jp/togo_museum/index.html
〔阿賀野市立吉田東伍記念博物館・〒959-2221新潟県阿賀野市保田1725-1→周辺地図(14番)TEL　0250-68-1200　FAX　0250-68-5016お問い合わせ　y.togo@oregano.ocn.ne.jp〕

1，吉田東伍は

越後の農民の子として生まれた吉田東伍は、「『郷土』の大地、それが『日本』の風土の一部であり、日本を正しく理解するためには、日本の風土を組み立てている郷土をしっかりと見なければならない」と考えていました。

十三年かけて編纂した、日本全土の「郷土」を集大成した全国地誌『大日本地名辞書』は人間活動の舞台としての「土地」、そこに刻まれた歴史の語り部としての「地名」を大切にすることを教えてくれました。―歴史的地名を失うことは郷土を失うことである―今日、現代的な課題としてその重要性、緊急性が叫ばれています。

東伍は生涯野にあって、まさに土地を耕すように黙々と研鑽を重ね困難を克服し、わが国全土の「郷土の未来」を見すえるための学問―歴史地理学の道を開いたのです。

2，『大日本地名辞書』とは

吉田東伍が独力で足掛け十三年かけて完成させた『大日本地名辞書』とはどんな辞書だったのか？
→地名辞書序文の冒頭に次のように記されています。
「一、本書は地誌にして、その名辞の索引に便利なる体裁を取りたり、即、地名辞書といふ」。地誌とは、その地方の自然・風土・文化の特性を研究し、記述したもの。つまり、『大日本地名辞書』はまさに日本全土の「郷土」を集大成した全国地誌です。

文字数千二百万字、取り上げられた地名四万千項目、完成から約百年の歳月を過ぎた現在も版を重ね続ける『大日本地名辞書』。頁を開くたびにそれぞれの「郷土」をより深く知り見つめ直すことができるでしょう。現在の地名が昔は、どういう名で呼ばれていたのか、その地名由来や、地域の環境はどのような情況だったのか、といったことについて知りたい時、この辞書を繙くことになります。

http://fuzambo.net/jisho/dainihonchimei/index.html

《吉田東伍の研究HP紹介》

「全国地図測量史跡」全文紹介
http://www5a.biglobe.ne.jp/~kaempfer/mapsuv200/shiseki/chubu/ch8.htm

吉田東伍記念博物館友の会通信　掲載記事ファイル
http://diary.jp.aol.com/rty8uqq/1.html

谷本玲大さんの　吉田東伍著『大日本地名辞書』pdf
http://www.tanimoto.to/lumber/index.html#dainihonchimei

00 大日本地名辞書_上巻目次 ·pdf ｜ 430,894 06/05/08版

畿内編

01 大日本地名辞書_山城國 ·pdf 0001頁～ 40,796,287 06/05/08版
02 大日本地名辞書_大和國 ·pdf 0190頁～ 25,374,689 06/05/08版
ftp://tanimoto.to/dnhnchimei/dnhnchimei02.pdf
03 大日本地名辞書_河内國 ·pdf 0308頁～ 9,269,873 06/05/08版
04 大日本地名辞書_和泉國 ·pdf 0348頁～ 4,792,257 06/05/08版
05 大日本地名辞書_攝津國 ·pdf 0368頁～ 22,758,865 06/05/08版
06 大日本地名辞書_近江國 ·pdf 0468頁～ 23,725,203 06/05/08版
07 大日本地名辞書_伊賀國 ·pdf 0579頁～ 2,889,750 06/05/08版
08 大日本地名辞書_伊勢國 ·pdf 0591頁～ 17,308,021 06/05/08版
09 大日本地名辞書_志摩國 ·pdf 0667頁～ 2,486,268 06/05/08版
10 大日本地名辞書_紀伊國 ·pdf 0678頁～ 19,937,879 06/05/08版
11 大日本地名辞書_淡路國 ·pdf 0764頁～ 4,790,004 06/05/08版

中国編

12 大日本地名辞書_丹波國 ·pdf 0785頁～ 5,430,361 06/05/19版
13 大日本地名辞書_丹後國 ·pdf 0810頁～ 3,461,812 06/05/22版
14 大日本地名辞書_但馬國 ·pdf 0825頁～ 4,600,932 06/05/19版

15 大日本地名辞書_播磨國 ·pdf 0845頁～ 13,244,003 06/05/19版
16 大日本地名辞書_備前國 ·pdf 0904頁～ 7,057,048 06/05/19版
17 大日本地名辞書_美作國 ·pdf 0935頁～ 3,858,365 06/05/19版
18 大日本地名辞書_備中國 ·pdf 0952頁～ 5,495,283 06/05/19版
19 大日本地名辞書_因幡國 ·pdf 0977頁～ 5,014,565 06/05/19版
20 大日本地名辞書_伯耆國 ·pdf 0999頁～ 4,036,270 06/05/19版
21 大日本地名辞書_出雲國 ·pdf 1017頁～ 9,743,577 06/05/19版
22 大日本地名辞書_岩見國 ·pdf 1060頁～ 3,420,150 06/05/19版
23 大日本地名辞書_隠岐國 ·pdf 1076頁～ 1,949,459 06/05/19版

大日本地名辞書 吉田東伍　目次　http://www.st.rim.or.jp/~success/dainihon_mokuji.html

大日本地名辞書　かも地名リスト　http://homepage1.nifty.com/moritaya/zisyo.html

《参考資料》

地理学者志賀重崇の序文「大日本地名辞書ヲ評ス」と題した一部分を紹介します。「堂々タル大版、一頁二二千三百字、全部一千二百万字、其ノ重量ニ於テ本邦空前ノ出版物……」。志賀は、「識見と断案にこそ真正の価値があり」と評し、一項が一篇の論文であると絶賛しています。地名辞書は読む辞書であると同時に、我国初めての全国地誌の資料であり、東伍独自の日本史論とも言えるものです。

千田稔著『地名の巨人　吉田東伍―大日本地名辞書の誕生』〔四六判、二四八頁、定価（税込）：2,835円 I

SBN 4-04-702126-1 〕

現代日本を見通した明治の大論客、吉田東伍を読み解く！

大著『大日本地名辞書』をほとんど独力でまとめ日本の歴史地理学を切開いた吉田東伍とはいかなる人物だったのか。明治という大変革期を先駆的に生きた在野の知識人の生き様を活写。

池波正太郎『鬼平犯科帳』盗人の〔呼び名〕づくりの宝典は——

http://homepage1.nifty.com/shimizumon/sanko/kiru_contents/kiru7/kiru7_sanko.html

雑誌に載った池波さんの仕事場の写真をルーペで丁寧にのぞいて、吉田東伍博士『大日本地名辞書』(冨山房)の背表紙を見つけたとき、胸のつかえが氷解した。三〇〇余人の少なくとも八割方は同書から引いた呼び名と推察できたからである。

地名資料室〔川崎市教育委員会文化財課〕http://www.city.kawasaki.jp/88/88bunka/home/top/ctop1.htm

欲しい辞書

〔「春風社」港町横濱よもやま日記より転載〕

仕事ではもちろん、そうでなくても、辞書を見るのは愉しい。「辞書の森」という言い方もある通り、中で色々遊べる。

諸橋轍次の『大漢和辞典』13巻なんかは遊ぶのにはもってこいだ。へー、こんな字みたことねーや、とか、この字の熟語ってこんなにあるのかよ、てなことで、適当に眺めているだけでも愉しい。そのまま突っ伏して寝てもいいし…。起きるとヨダレが零れていたりするけど、ティッシュで拭けば別にどうということもない。

最近買った辞書で面白かったのは、ぱる出版の『日本アナキズム運動人名事典』。定価24150円と少々値は張るが、なんと、我らが新井奥邃先生もちゃーんと出ているし、ウチの『新井奥邃著作集』のことも載っている。中里介山や宮沢賢治も項目として取り上げられている。この人たち、アナキストかよ、とも思うけど、いい意味で、変てこな面白いことを色々考えていた人たちの群れであることには違いなく、これは相当遊べる。

いま欲しいのは吉田東伍の『大日本地名辞書』。明治期に刊行されたものなのに、今でもこれを越える地名辞書はないとされる。民俗学者で日本地名研究所の所長である谷川健一さんは『独学のすすめ』のなかで、烏の鳴かぬ日はあっても『大日本地名辞書』を開かぬ日はなかったと最大級の賛辞をおくっている。ほかの地名辞書と違い、その土地土地の風景が浮かんでくるような描写、と言われては欲しくなって当り前。増補版全8巻、古書だと10万円。

もう一つ、講談社から出ている『日本近代文学大事典』全6巻。前の出版社にいたとき、烏の鳴かぬ日はあっても『日本近代文学大事典』を開かぬ日はなかった！　か？　そか？　ま、いいではないか。この事典にもちゃんと新井奥邃が載っていた。要するに、新井奥邃が載っている辞書はいい辞書なのさ。だははは…。こっちは古書で2万5千円から5万円ぐらい。

思い出した。司馬遼太郎が中学生のときに、社会科の先生に「アメリカのニューヨークは、どうしてニューヨークというのですか」と質問して怒られたそうだ。先生、きっと意地悪な質問と受け取ったのだろう。それと、なんでニューヨークと呼ばれるようになったかの答えを、おそらくその先生知らなかった。司馬少年、学校帰りに町の図書館へ寄って自分で調べ、疑問が氷解したそうだ。

この例からも判るとおり、充実した辞書さえあれば、かなりの知識は身につくもの、学校や先生に頼る必要はない、というのがぼくの考え。人に訊くより自分で調べたほうが愉しいし。

それにしても、二つあわせると12万5千円かー。ふーん。